
日本人間関係学会ニュース 第 86 号 発行日:2016.2.29

News No.86 Japan Association of Human Relations February 29, 2016

発行：日本人間関係学会 広報委員会 E-mail:tanikawa@kusw.ac.jp 谷川和昭研究室
事務局：〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641 東京理科大学理工学部教養科川村(幸)研究室
FAX:04-7122-1560 E-mail:jahrjimukyoku@gmail.com

[内容] ☆大会委員長挨拶 ☆全国大会特集 ☆人間関係学探訪 ☆支援活動 ☆書籍紹介 ☆外務省講演 ☆事務局だより

《大会委員長挨拶》

第 23 回全国大会を終えて

大会委員長 永野 典 詞
(九州ルーテル学院大学教授)



日本人間関係学会第 23 回全国大会（以後、今大会と略）を九州は熊本で開催できましたことに深く感謝申し上げます。さて、無事に大会を終えて感慨深いものがあります。

準備の段階から精一杯の「おもてなし」をしたい、との思いで香崎大会事務局長、宮崎大会事務局長補佐と共に話し合いを重ねてきました。幸いにして、本学の清重学長をはじめ事務局からも出来る限りの協力をした、との申し出がありました。

特に清重学長からは九州ルーテル学院大学の「おもてなし」をするように、との命を受けていました。

今、振り返ると、ご参加いただいた会員の方にご満足いただけたか不安もあります。多少のトラブルはありましたが、何とか無事に大会を終えることができたことに安堵しています。

以下に私が大会を終えて印象に残っている 2 つの事柄について記したいと思います。まず 1 つ目は、情報交換会です。多くの会員（ほぼ、参加者全員）にご参加いただき、会員相互の人間関係を深めることができたことです。本学会は他の学会以上に、とても和やかで「わきあいあい」とした会員同士の「ふれあい」ができました。そして、2 つ目は、メインテーマ「互いに認め合い、赦し合える人間関係を目指して」に沿った議論が深められたことです。今の日本にとって老若男女問わず必要なことではないかと考えています。しかし、とても難解であり、1 人 1 人の意識改革と幼少期や学童期、青年期の子どもや大人に関わる専門職の重要性が示唆されました。このテーマで議論できたことに大変嬉しく思っています。

最後に、今大会を無事に終えることができましたのも、実行委員をはじめ会員の皆さまのお力添えの賜と考えております。今後ともよろしく願いいたします。



大会前夜の食事会
前代未聞のおもて
なし（写真左）
初日の交流会では
学生スタッフ全員
から一言（写真右）



大会特集—基調講演、シンポジウム

基調講演

地域社会で互いに認め合う人間関係づくりをめざして

基調講演は、本会理事長の小山望氏が登壇し、認め合う地域社会の人間関係を目標として何が大切となってくるかについて多角的に述べられ、会場全体が耳を傾けた。

互いに認め合う人間関係づくりの基礎は、家庭や職場、地域社会での人間関係づくりにあるが、高齢者、障がい者、移民労働者、引きこもり、慢性疾患を持つ人といった社会的弱者の社会的排斥が問題になっている。それ故、社会的排斥の解消と機会均等の保障に向けた取り組みが求められる。

しかし、その取り組みは、できるだけ人生早期の幼児期から行っていくのが望ましい。互いの違いに気づきながら育ち合い仲間意識を育てる環境づくりこそが重要である。子ども時代に自分と違う存在を知り、ぶつかり合いながらも互いに受け入れ、認め合う人間関係

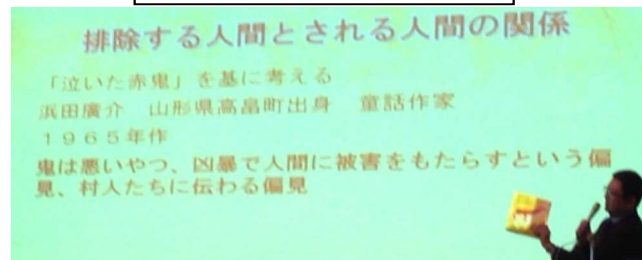
係、異質な存在に対する寛容性、多様な存在を受け入れる経験があることは、国際社会を生きていく意味でも大切である。

以上のような問題意識から、講師の小山氏は、ステレオタイプの例、童話『泣いた赤鬼』、差別意識と対象、日本人の意識、ユング心理学の「人格系と発達系の対立」、そして日本人間関係学会が支援活動している被災地となった南三陸町における「地域で対立する感情や亀裂」、絆は一つという神話の崩壊を挙げ、一つ一つのトピックを丁寧に話された。そして締め括りに、日本人間関係学会としていかに「対立した人間関係を癒やす」ことができるのか、こじれた人間関係を修復できるのかが役割であり、今後も被災地との関わりを継続していくことが学会として大事になるとまとめた。（文責：谷川）

基調講演の開始直後



『泣いた赤鬼』を手にする小山氏



第23回全国大会の開会の模様、このあと基調講演等が始まった



シンポジウム

ソーシャル・インクルージョン(共生社会)に向けて専門職の役割 ～承認し受容する社会を作るため～

今日、差別を受けやすい人々だけでなく、地域社会全体において「人々がそれぞれの多様性を認め、共に生きること」が目指されている。そこでは各領域の専門職が今、どのような役割を担うことが求められるのか、さらに、求められる社会のあり方などについて各専門領域の研究者5名が登壇し、議論が行われた。

<学生支援の立場から> 甲子園短期大学の早坂三郎氏は、感情の表出を受けとめて、分かち合う、共有する、改善につなげることの大切さに言及された。そして、耐性、レジリエンス(跳ね返す力)、ストレングス(元来持っている意欲・素質・嗜好・希望・自信)、エンパワーメントといったキーワードから、学生を育てること、また障害のある方への支援が重要とした。

<心理学の立場から> 埼玉学園大学大学院の小山 望氏は、自分にとって他人にないもの、他人にとって自分にはないものがあるとして、その多様性を尊重した社会(ダイバーシティ)から寛容な心を育むことなどを提起され、インク

ルーシブ教育の浸透と雇用が大事であると提案した。

<ケアする人のためのケア-高齢者支援の立場から-> 京都ノートルダム女子大学の三好明夫氏は、いわゆる「一億総活躍」にもふれるなかで、ケアされる人も大事、そしてケアする人のためのケアも大事であると提言した。

<子ども・子育て支援の立場から> 九州ルーテル学院大学の永野典詞氏は、「言葉の大切さ」に言及し、言葉が大切にされていないことが子どもに弊害をもたらすと指摘された。伝える力、受け止める力、柔軟に対応する力が、専門職には求められるとした。

<法学・人権論の立場から> 聖カタリナ大学人間健康福祉学部の山本克司氏は、人権や自己実現の視座から、高齢者・障がい者に優しい社会とは何か、憲法13条の個人の尊重から相手の立場に立ち、自由、表現、合理的な配慮などに言及した。

(文責：谷川)

シンポジウム、そして総会終了後に記念撮影



人間関係学探訪シリーズ②

日本人間関係学会は教育・医療・心理・福祉など研究者だけでの集まりでなく、人間関係に関心のある企業人、学生、市民など多種多様な会員が集まっています。そうした会員のお一人おひとりにスポットを当てて、Q&A形式で、その実践やお人柄、人間関係への想いを語っていただき、人間関係学の探究に何らかの示唆を得ることが本シリーズの意図・ねらいです。シリーズ第2回では、第14回全国大会委員長を歴任された佐藤貴志先生に語っていただきました。

佐藤貴志氏

特定医療法人北勢会理事長。スクールカウンセラー。いなべ市教育委員。桑名警察署警察協議会会長。NPO法人いなべ市文化協会(FMいなべ)理事長。1962年生まれ。



「味な店・葵にて」左から釜野、佐藤、寺脇、谷川和、早坂、松葉、渡部、谷川俊、大森克

谷川(広報委員会)：こんにちは。佐藤貴志先生。9月5日に私の本務校・関西福祉大学にお越しいただき、関西地区会研究会でご発表されました。大学に来られての印象はいかがだったでしょうか。佐藤：いつも関西地区会で谷川先生とお会いするのは京阪神界限。私も結構遠いところから参加していますが、先生も遠いところから来られているのだな…ってことがよくわかりました。東京へ出張の際に泉岳寺には度々訪れています。そこでいつも赤穂へ訪ねたいと思っていたのですが…やっと『忠臣蔵』ゆかりの赤穂の街を訪れることができました。そしてその上、その地に設立されている関西福祉大学で発表させて頂けたということ、片道3時間半(250km)の快適なドライブも楽しめた上に、のどかな塩田の跡地というのびのびしたキャンパスで、とてもリフレッシュすること

ができました。

谷川：ありがとうございます。三重から兵庫の西の端まで3名でお越しいただいて本当に恐縮でした。研究会後に播州赤穂駅近くの「味な店・葵」で一緒させていただいたのも良い思い出です。ところで、ご出身はどちらになりますか。

佐藤：生まれも育ちも三重県いなべ市北勢町麻生田ですが、本籍地は愛知県名古屋市昭和区緑町。

「愛・地球博」の時には役立った自宅もあります。

谷川：とてもダンディですが、おいくつですか。

佐藤：今年は八方塞の年回り、3月12日に誕生日を迎えます。精神年齢は低くみられがちです。

谷川：お若くいらっしゃいます(笑)。では、ご経歴についてお教えてください。

佐藤：もの心ついた時は患者さんたちと遊んでいました。つまり、幼少の時から精神科病院の中で

育ちました。早坂副理事長は大学、大学院の10年先輩で恩師です。大学院在籍中の昭和61年4月より北勢病院臨床心理室に勤務。昭和63年6月に結婚。平成元年4月に芦屋大学教育学部教育学研究博士後期課程修了。平成4年4月に日本心理学会認定心理士。平成5年3月、臨床心理士。平成8年4月精神障害者生活訓練施設(援護寮)あじさい施設長。平成9年6月より特定医療法人北勢会理事長に就任して現在に至っております。冒頭にご紹介頂きました様に第14回全国大会は初めての試み、単科精神科病院で開催して頂きました。平成25年には人間関係士も取得しました。

谷川：先生のご趣味は何ですか。

佐藤：ひたすら歩くことと車を走らせること。毎日早朝と夕方「ダイアン」(黒色、ラブラドル・レトリバー、2014年3月23日生まれ)と1時間ほど歩きます。また時々山登りにもチャレンジします。我が家から望む鈴鹿山脈のセブンマウンテン、中でも初夏のシロヤシオが羊のような竜ヶ岳が大好きです。車を走らせた時は、仕事、プライベートに関係なく、必ずお寺や神社を巡り、ご朱印集めも楽しみです。

谷川：実に多様ですねえ。では、学会に入会してどのくらいになりますでしょうか。

佐藤：何年になるのでしょうか。初めて参加したのは東海大学で開催された第4回大会でした。かれこれ20年というところです。

谷川：学会に入られたきっかけは。

佐藤：早坂先生(写真中央)にお誘い頂き、お伴したのがきっかけです。

谷川：関西地区会でもいろいろお聴きしましたが、現在の活動実践についてはどうですか。少しお話をいただけませんか。

佐藤：一応メインは医療法人の経営(運営)ということになります。精神科医療・福祉の領域は、自分が職についてからすぐさま、昭和62年に精神衛生法から精神保健法、さらに平成7年には精神保健福祉法へと法律が次々と改正(整備)されました。自分が理事長職に就いた時は280床だった病床が今では174床。社会的入院の解消に取り組んだ結果、130人ほどだったスタッフがいつの間にか210名を数えるようになり、益々社会的責任を負った気がします。また、20年前に学校現場で健康な子どもたちに関われることを楽しみに始めたスクールカウンセラーも時代と

共に変化しており、費用対効果が求められるようになり、第47回関西地区会で発表させて頂いたとおり、平成24年度からは中学校とその校区の小学校4校をまとめて担当するという『学びの環境づくり支援事業SC』にチャレンジしています。谷川：理事長として法人経営、さらに学校現場にも足を運ばれて多角的に取り組みされておられますね。ところで、本学会には人間関係士という資格があり、人間関係力を打ち出しています。7つありますが、大事になさっている順番に並べ替えるとうなりますか。

佐藤：①他者を受容し、共感できる力(他者受容・共感力)、②人間関係を取り巻く全体状況を多面的に認識し、洞察する力(全体認識・洞察力)、③個人・集団・社会の関係性を理解し、その連携を促進し、協働する力(連携・協働力)、④人間関係の問題解決を調整し、支援する力(回復・調整・再生力)、⑤人と人、個人と集団をつなぎ発展させる力(媒介力)、⑥個人と個人、個人と集団、集団と集団との関係を共に育み、充実させ、展開する力(創造・発展力)、⑦自分自身を受け入れ、生きる意味を問い続ける力(自己受容力)という順番ですかね。

谷川：並び替えてみられてどうでしたか。ご感想をお願いします。

佐藤：どれも大切なことばかり、順番をつけてよかったのかな？個人としては①を大切にしていますが、経営者としての立ち居地では②、SCとなると③、④あたりがトップになるのかな？

谷川：連携・協働力、回復・調整・再生力ですね。では、最後にもう1つだけ。人間関係、こうすれば良くなりますよという何か提言なり提案はございませんか。

佐藤：感謝の気持ちを持ち続ける。喜怒哀楽、適切な距離を見極める。

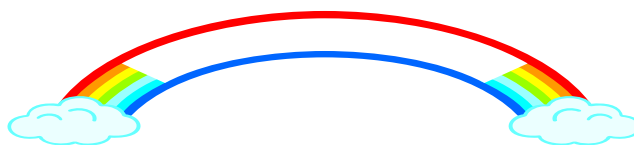
谷川：ありがたさを感じ続け、感情そのものとのつきあいを大切になさるのですね…。来年度秋に、全国大会が関西福祉大学で開催されますが、また皆さんのお越しをお待ちしております。今日は貴重なお話をどうもありがとうございました。

(インタビュー：2015年11月14日)



遠足尾根より望む竜ヶ岳 シロヤシオ 昼寝する愛犬ダイアン

支援活動委員会からのご連絡



東日本大震災から6年目を迎えようとしています。日本人間関係学会ではいち早く宮城県南三陸町への支援活動を学会として委員会を発足させました、

今まで仮設にお住いだった細浦の方たちも2016年3月には高台への住宅移転が終了します。本学会では、継続して南三陸町へ支援活動として足を運ぶことが決まりました。引き続き、ご参加くださる学会員、カンパ下さる方を募集しております。

今後の支援活動はどのように行うか、南三陸町の保健福祉の行政担当者と連絡を取りながら進めていきたいと思っております。細浦地区の子どもたちとは継続して関わっていきたくて考えております。支援活動に行く時期は、毎年3月、8月がメインで10月、12月にも支援活動を行うことがあります。1泊2日、2泊3日での活動が多いです。南三陸町までの交通費、宿泊費は各自自分で負担となります。現地までのレンタカー代は学会から払ってもらっています。この機会に参加したいかたは是非、河合までご連絡ください。

活動内容: 子どもたちとの遊び、お茶のみ会の開催、夕方から食事しながら交流会も行います。盆踊り、夏祭り、ワカメの収穫の手伝いなども行ってきました。

連絡先

南三陸町支援活動委員会 委員長、河合高鋭 (和泉短期大学)

Email: minamisanriku_jimukyoku@yahoo.co.jp

メールには、タイトルを「支援活動参加希望」または「支援活動カンパについて」として頂き、お名前・ご所属・ご連絡先・Emailを記載ください。

返信なき場合は、学会事務局へご連絡ください。

《会員の書籍紹介》

「聴くところ」

本書は、監修の小山 望先生が「コミュニケーションを円滑にしたい、対人関係を学びたい、もっとうまく話が聴けるようになりたい、人間関係を上手に築きたい、カウンセリングの基礎や知識を学びたい、カウンセリングの経験を積んでいるが、さらに成長したいなど読者の目的はさまざまであっても、そのどれにも対応できる内容を備えたすぐれた著書です」と記述しているように、聴き上手になるための真のノウハウを網羅しています。

よりよい人間関係とコミュニケーションアップをはかるために役立つ一冊です。



◆平成 27 年 12 月発行 監修 小山 望 (埼玉学園大学大学院教授)

著者 杉山 雅宏 (東北薬科大学)

◆1,300円 (税別) ◆A5判 ◆215 ページ

◆発行: 悠々舎 ◆発売: 東京六法出版

小山理事長、外務省主催のNGO研究会で基調講演、シンポジウム

2016年1月7日、東京国際フォーラムで外務省主催・NPO法人リトル・クリエイターズ運営の「国際協力における障がい児や青少年の社会的弱者に対する支援のNGOの役割」というテーマでNGO研究会がありました。小山理事長は「ソーシャルインクルージョンをめざした社会—多様性に寛容な社会—」というテーマで基調講演されました。続いて、シンガポール企業家協会の会長のテン・テンダー氏は、「社会的弱者のための経済的支援」というテーマで講演されました。さらにシンポジウムも行われました。

基調講演1 小山望 ソーシャルインクルージョンをめざした社会—多様性に寛容な社会—

基調講演2 テン・テンダー氏 (シンガポール企業家協会会長)「社会的弱者のための経済支援」

シンポジウム 「Future Ready Asia 脆弱な立場に置かれた人々への優しいアジアの新しいプラットフォーム」

司会 小山望・長谷川仰子 (リトル・クリエイターズ代表理事)

シンポジスト

- ① テン・テンダー氏 (非駐在オマーン・シンガポール大使)
- ② ラルフ・リム氏 (マレーシア NGO 代表 スマイル・チーム)
- ③ 安部隼人氏 (生まれてき良かった映画の主人公、重度の障がい者)
- ④ 奈良松範 (諏訪東京理科大学教授)
- ⑤ 甲斐田万智子 (NPO 法人 国際子ども権利センター代表理事)

今回のシンポジウムは日本国内だけでなく、マレーシア、シンガポールなどアジアで社会的弱者への支援活動を行っているNGOの団体や政府職員、市民が集まって、社会的弱者の立場にある人々をどのように支援し、社会参加を可能にしていくかについて討議されました。障がい者など社会的弱者が持続的に自立できるためのソーシャルエンタプライズの方法についてのディスカッションがありました。シンポジウムの終了後、小山理事長はシンガポール企業家協会会長（日本でいう経団連会長）のテン・テンダー氏と林氏と3人で食事をともにしました。テン氏から障がい者を雇用してビジネスとして利益を出していくソーシャルエンタプライズの方法を教えてください、大変参考になったということです。小山理事長によると、弱者への支援はボランティアで終わってははいけません。障がい者自身が自らが就労によって生活し自立できるような経済的な仕組みを作ることこそ、持続的な生活ができると言います。テン氏から得た示唆として、経済格差が進行している日本では、政府はソーシャルエンタプライズをもっと支援することが必要で、企業が利益を上げて格差社会の解決にはならないことを指摘しています。経済活動は金儲けのためにだけするのでなく、人々が幸せになるために行うのだというテン氏の願いが広く共有されることが大切であると小山理事長は強く感じたと話していました。次回は7月にマレーシアで行う。

外務省NGO研究会にて 2016. 1. 7



写真 左からテン・テンダー氏、長谷川代表、奈良松範諏訪東京理科大学教授、小山望理事長、甲斐田万智子氏 国際子ども権利センター代表、ラルフ・リム氏マレーシアNNGO代表、最前列は安部隼人さん

《事務局だより》

- ✓ **会員状況** (2/15 現在)
228名 (内訳：正会員 191名、準会員 36名、賛助会員 1名)
- ✓ **新入会員** (2015/10/1～2016/2/15)
10名 (内訳：正会員 10名、準会員 0名)
- ✓ **新入会員紹介** (順不同・敬称略)
松原新、荻野洋子、木林勉、草野幸子、鈴木郁子、牛島豊広、藤井厚子、富田千晶、阿部暢夫、安達周子
- ✓ **退会者** (10/1～2/15)
14名 (内訳：通常退会者 1名、会費未納等による退会者 13名)
- ✓ **2015年度 (2015年10月～2016年9月) 会費納入について**
すでに振込用紙をお送りしました。なるべくお早めにお納めください。用紙が届いていない方は事務局へご一報ください。自動引き落としを推奨しています。ご希望の方は事務局へその旨お知らせください。必要書類一式をお送りいたします。
- ✓ **法人化について (報告)**
一般社団法人化に向けて手続きを開始いたしました。経過は随時報告いたします。学会としての手続きは、次回総会で「日本人間関係学会」をいったん解散し、新たに「一般社団法人・日本人間関係学会」を組織することになります。会員のみなさまにはご協力をお願いすることになりますが、なにとぞよろしくご願ひ申し上げます。
- ✓ **事務局からのお願い**
住所・連絡先・会員身分の変更のある方は至急事務局までご連絡ください。
FAX: 04-7122-9219 E-MAIL: jahrjimukyoku@gmail.com

<事務局長の独り言>

最近出会った本の中から、下記の3点を紹介します。人間ものではなく動物ものですが、われわれ人間の生命を考えるとときに必要なことかと思ひます。

お暇なときに、ページをめくってみてはいかがでしょうか。

- ◇ 『動物のいのちを考える』高槻成紀編著、遡北社、2015年10月、ISBN: 978-4-86085-121-7、2,200円 (税別)
- ◇ 『シカ問題を考える—バランスを崩した自然の行方』高槻成紀、ヤマケイ新書、山と溪谷社、2015年12月、ISBN: 978-4-635-51009-7、800円 (税別)
- ◇ 『タヌキ学入門—かちかち山から3.11まで身近な野生動物の意外な素顔』高槻成紀、誠文堂新光社、2016年1月、ISBN: 978-4-416-11547-3、2,000円 (税別)

(編集後記)

今号は4年に1度しかこない2月29日の発行としました。この29日生まれの人の誕生日はどうなるのでしょうか。いささか疑問が湧いてきます。もし学会員の皆さまのなかにお心当たりがございましたらエピソードなどお寄せいただけますと幸いです。ところで、毎回のことですが、ニュース記事について、先生方どなたも快くお引き受け下さり厚く御礼申し上げます。今号も充実した内容に編集することができました。なお、全国大会開催担当としての準備にあたるため、しばらくニュース編集(87～89号)を谷川から永野典詞先生に交代することとなりました。次号から「発行：永野典詞研究室」となります。よろしくご願ひいたします。(谷川)